

大願成就の初優勝

「一番欲しかったタイトル」

通算4 オーバー 148

谷川富夫（つくも）がプレーオフを制す



「うれしか」と喜ぶ谷川と応援に駆け付けた美帆夫人[㊦]

ウイニングパットは1m強。その前にプレーオフの相手・江崎が3パットをしてボギーが確定していた。「入らなくてもいい。強く打とう」。谷川にすれば、たとえ外れてもプレーオフが続くだけだった。強めのパーパットはど真ん中からカップの底に沈んだ。

「うれしか。一番欲しかったタイトル。いつかチャンスが来るとは思っていたが…。まさか」と初優勝の弁もしみじみとしていた。これまで「九州」のつく大会のベストは4位。2、3位を一気に飛び越した。長崎県佐世保市出身の谷川にとって個人の栄冠ももちろんだが、「塚根さん以来、長崎県は誰も勝っていない、と聞いていたので（九州一に）なれて良かった」と郷土愛も口にした。ただ、塚根卓弥前九州ゴルフ連盟競技委員長が2002年の九州シニアを制した後も尾藤牧衛（島原）の九州ミッドシニア3度優勝など長崎県勢数人が九州一に上り詰めている。いろんな勘違いが交錯したのか、塚根前競技委員長のインパクトが強かったのか。

クラブは「昼が暇なので」との理由で31歳から握り始めた。谷川の実家は漁師で、本人も中学1年から船に乗った。漁は午前中には終わる。そこでゴルフと出合う。競技ゴルフは1991年から。44歳まで巻き網漁船の漁労長を務め、現在は建設業と除菌剤の会社を営む。「仕事はゴルフ場でいただいております。アマチュアは仕事がうまくいかないと、ここ（大会）には来れないし」と谷川にはコースが営業の場となっている。身長158cm、体重70kg。プロゴルファー比嘉一貴のような体形だが、長く船乗りをしていただけあって「足腰のバランスがいい」と安定感抜群の下半身は漁で培われた。



11月の日本ミッドシニアは昨年につき2度目。初出場の昨年はいきなり4位タイに食い込んだ。「辛抱する大切さを学んだ。それが今大会も役に立った」。今年は肩書が厚くなったの全国大会である。「ピンをしっかりと見て攻めていこうと思う。でなければチャンピオンにはなれない」。一直線に頂上を見据える。

「満足だし、ショックだし」 2位の江崎

○…プレーオフで敗れた江崎は複雑な表情を浮かべた。「満足だし、ショックだし…」。当初の目標であるシード獲得は達成したものの、「こういうチャンスはめったにない」というタイトルが目の前にあったのに逃してしまった。通算4オーバー148で並んでのプレーオフ。18番の第2打はピン左12mに2オン。ファーストパットを2mショートし、パーパットも外れた。「パットが下手。それよりも17番ロングでのダボが痛かった」と第2ラウンドの17番ロングでのダブルボギーを悔やんでいた。

